

琉球大学学術リポジトリ

集団の読みを深める ―宮沢賢治「やまなし」の授業実践から―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 信夫, Miyagi, Nobuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19048

集団の読みを深める

—宮沢賢治「やまなし」の授業実践から—

宮城 信夫*

Reading the group is deepened. Through the class of Kenji Miyazawa “Yamanashi”

Nobuo MIYAGI*

1 個の読み、集団の読み

学校教育、特に国語科教室で作品を読む意味は何か。一つの側面として次のような記述がある。

「国語科における読解は、学習者の読みをきたえる訓練の場である。少なくとも訓練という性格は、その主要な一部をなしている。訓練とは、言語表現を通じて、部分の意味と全体の意味との相関性を緻密精細に読み調べることである。」(国語教育指導用語辞典 教育出版社 1984年)

実際の国語教室では、「鍛えられるべき児童」と「よく鍛えられている児童」が混在している。その読書経験や生活体験、読みの履歴などから、一読後に作品の核をつかむ児童もいれば、何度読みを重ねても表面的な捉えにとどまる児童もいる。この両者の読みを深めるにはどのような手だてが必要となるのか、個の読みを集団の読みにどのように位置づけていくのかといった点について、難解といわれる宮沢賢治の「やまなし」の授業実践をもとに考えていきたい。

2 読みを深めるとは

読みを深めるというのはどういう事か。先に述べたように、「部分の意味と全体の意味との

相関性を調べる」ことが読みであるとすれば、その相関性の強さをどんどん発見していくことであろう。作者や筆者の伝えたいことをより明確に豊かに捉えていくことが読みを深めていくことであると考えられるのである。そうすることによって、作品の新しい意味、新しい面を見つけ、味わい直すことができる。それは作品の意味体系に新しい意味を付与する感覚に似ている。こうした手続きが児童の中に生じることが読みを深めるといふ事なのである。

3 教材について

「やまなし」は、小さな谷川の底を写した「五月」と「十二月」の2枚の青い幻灯という設定のもとに、川底の情景とそこに生きるものたちを描いた作品である。前書きと後書きに挟みこまれた構造の2枚の幻灯の世界は、かきの兄弟や親子関係を中心にして描かれている。子どもたちのイメージは、鮮やかな色彩を感じさせる言葉や光と影の効果を用いて立体的に表現される川底から見た情景と、かきの兄弟の会話によって広がっていく。擬音語や擬声語、賢治の造語と巧みな比喩表現を自覚的に読み取っていく活動が、読みの総まとめとしてふさわしい教材といえる。

*琉球大学教育学部附属小学校

ところで、「2枚の幻灯」が表すように2つの世界が対比的に描かれている所にこの作品の構成上の特色がある。生命の躍動する「五月」に、クラムボンと魚とかわせみが、食べる、食べられるという関係をかにの兄弟に見せつける。昼間の動的な世界の中で、弱肉強食の世界が開かれるのである。ここで生は死の上に成り立っていることを子どもたちは知る。

十二月は五月と対照的に描かれる。日光の世界ではなく、夜の幻想的な世界であり、やまなしの実りがもたらされる豊穡の世界である。やまなしは天井からもたらされる自然の恵みなのである。やまなしもかわせみも水上からやってくるのであるが、その意味合いは決定的に異なる。五月の段階では、弱肉強食の世界観が読み取れるものの、十二月まで読み進むと、死が生に新たに生かされる自然界の仕組みに気づかされる。賢治の自然に対するとらえ方、考え方を知るのである。

こうした教材の価値を、仲間と考えを交流したり、調べたことや解釈したことを交流したりするなかで読み取らせていきたい。特に隠喩や直喩などのレトリックに着目するとともに、全体の構成のなかで対比的に描かれることばの探求を通して作品の主題に迫っていきたい。

また、本教材にはクラムボンを殺す魚につい

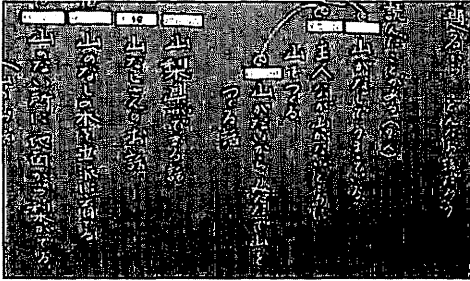
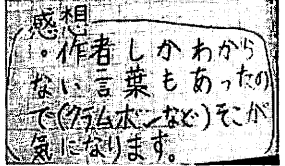
て「悪いことをしているんだよ。取っているんだよ」というかのにのせりふがある。賢治の殺生についての考え方が現れた表現である。

こうしてみると、本作品では登場人物の心情の移り変わりや人物像、場面場面の気持ちを創造したり解釈したりしても主題に迫ることは難しい。「やまなし」に託された、自らを犠牲にして他者を幸福にする生き方、自然に行われた営為が他者に布施するような世界を感じ取ることが重要になってくる。人物ではなく、ことばを通して作品の世界そのものを味わい、考えを深めていくような学習を展開する必要があるのである。こうした賢治の心象スケッチを仲間とともに味わい、さらに宮沢賢治の他の作品を読み深め、賢治の世界観について考えさせたい。以下、実践をもとに、集団の読みの深まりについて考察する。

4 単元目標

- 幻想的な表現からイメージを広げ、叙述に即しつつ情景を想像する読みの楽しさを味わうことができる。
- 対比された表現の工夫を読み取り、仲間とともに主題に迫ることができる。
- 宮沢賢治について調べたり、他の作品を読んだり、オノマトペ事典などを作ったりする。

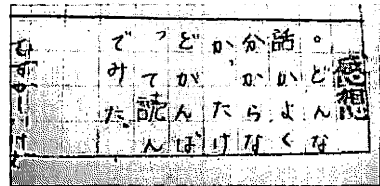
5 授業の実際（学びの経過と今後の計画）

主な学習活動	学びの経過と今後予想される子どもの姿	教師の手だてと読みの深まり
<p>【第1時】 「やまなし」の題名 読みと疑問点など を書く</p>	<p>*生徒指導で10分ほど話した後授業をする 「やまなし」 どんなお話でしょう。</p>  <p>【図1 第1時の板書】</p> <p>自由に発言してもらおう。 「山がなしでうまっている話」 「主人公が山の無い所に山を作る」 「山梨県ができる話」</p>	<p>板書で個々の意見を全体の課題にしていく</p>  <p>【図2 感想①】</p>

	<p>「山梨さんの物語」 「山に梨の木を立派に育てる話」 大別すると、山を作る、梨を作る、山梨県の県作りの話という3つに分類できる。次に黙読をし、疑問点を出してもらった。 児童から語句に関するもの、表現に関するもの、賢治独特の造語に関するものが出た。 「クラムボンは何者なのか」 「クラムボンはなぜ殺されたか」 「イサドはどこにあるのか」 「クラムボンは誰に殺されたか」 等である。</p>	
--	---	--

【考察】

その日の授業記録には次のように記されている。
感想は、「よくわからない」「意味がわからないけど、がんばって読んだ」「不思議が一杯詰まっていた」等があげられた。児童にも難解な作品とうつつたようである。導入ということもあり、全体が教材に向かう姿が見られた。作品の難しさが意欲の減退ではなく作品を読み進めるための原動力としていきたい。

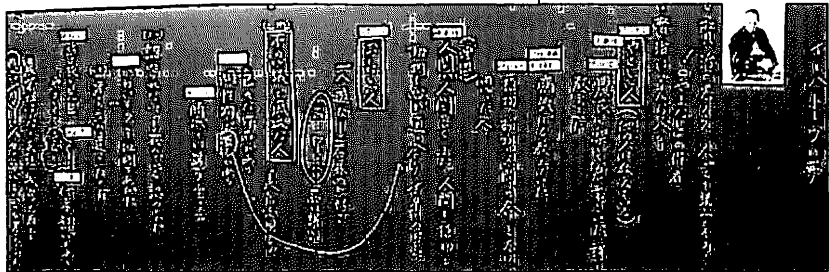


【図3 感想②】

この記録から、導入時、児童の意欲面への気がかりが見て取れる。疑問は表出しているものの、ほとんどの児童は作品を読めていない。さすがに難解といわれる作品である。全体が教材に向かったのは導入という位置づけだからであり、マンネリ化に陥ると途端に崩壊する。集団の読みを深めるためにいくつかの手だてを打つ必要性を実感しているのである。

<p>【第2時】「イーハトーブの夢」を読み賢治の生き方や考え方を知る</p>	<p>*全体朝会で10分ほど遅れる。その後朝会のふり返りを入れたため、5分ほど使う。実質30分の授業であった。 「イーハトーブの夢」を全体で音読するだけで終わった。</p>	
--	---	--

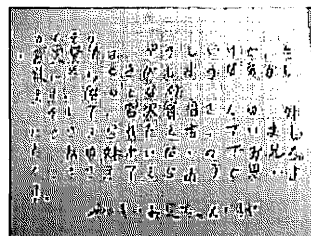
<p>【第3時】「イーハトーブの夢」を読み、賢治の生き方や考え方を知る</p>	<p>「やまなし」を読み解くために、作者賢治の生き方や考え方について、児童の考えを交流した。</p>	<p>作品に対する課題意識を深める</p>
---	--	-----------------------



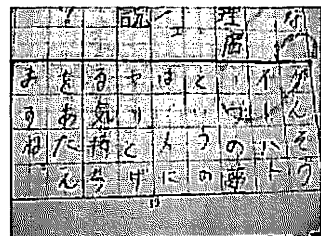
【図4 第3時板書】

【考察】

児童からは「優しい人」「おとなしい人」「不思議な人で風流な人」「認められずかわいそうな人」「仕事熱心な人」という意見が出された。なぜそう思うかという根拠について問いかけ、それぞれの事例を教科書からみることができた。そのなかで「命を大切にしたい人」や『北守将軍と三人兄弟の医者』から「人間も動物も植物も心が通い合う世界を求めた」「石にくわしい人」など、「やまなし」の作品理解に迫る考えが出されてきた。「やまなしのことももっと読みたいようになってきた。」「また『宮沢賢治の作品がもっと読みたいようになってきた。やまなしのことももっとよく知りたい』という意欲的な感想も見られたが、「賢治は優しい人だと思った」などの表面的な感想も見られた。



【図5 感想③】



【図6 感想④】

【第4時】

インターネットを使って宮沢賢治のことをもっと調べてみよう

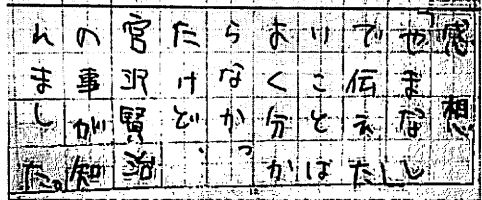


*「やまなし」を読み解くために、もっと賢治のことを調べようという意見が出たため、インターネットで調べることになった。1時間の予定であったが、4時間目の専科の時間が急ぎょ無くなったため、20分ほど延長することになった。児童は、様々な情報を獲得していた。「クラムボンの説は5つ有る」「賢治は三ツ矢サイダーを好んでいた」「イサドには語源があるようだ」「イーハトーブは岩手県のことだ」等である。

目的意識を持って教材とかがわかる
作品に対する課題意識を深める

【考察】

その日の感想では、「賢治の作品にはユーモアがあり、動物や自然とのかかわりを求めていることがわかった」という、作品の底流に関するものもあった。また「やまなしに自分の人生を重ねていた」と感想を書いた子に「なぜそう思うか」と尋ねた所、「妹トシが死んだ後に書いてあるから、寂しさを伝えたいと思った」と答えていた。作品の核心に迫りつつあることを感じた。ただ、友だちとの交流については情報の交換で時折見られる程度であった。



【図7 感想⑦】

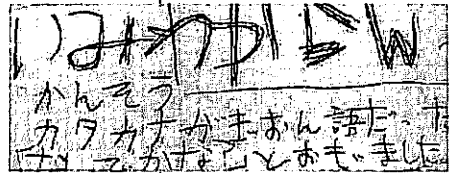
このように作品の周辺から理解を深めていく作業を行ったが、「やまなし」においてはこうした作業も必要となってくるのではと考えた。難解な作品に対しては、叙述に即して読むことの限界も感じられた。

【第5時】

「やまなし」の擬声語、擬態語、賢治の造語について考える

「やまなし」に出てくる擬態語と擬声語について考えた。まず、トブンとサラサラを板書し、共通点と相違点をあげた。「どちらも水の音」が同じで、「次に文章が続く」「言葉が違う」などが相違点としてあげられた。そこで、「言葉が違う」という発言に着目し、同じ音が繰り返されていることばを教科書から抜き出させた。その際、「五月」と「十二月」のグループに分けて探させた。どちらの場面でも擬態語や擬声語が多く使われていること、その効果などについて全体で確認した。

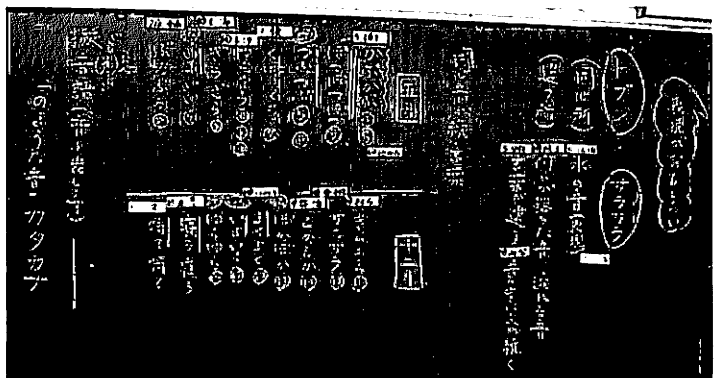
ことばに対する課題意識を持たせる



【図8 感想⑧】

【考察】

ことばを見つけようというときには、積極的に教材とかがかわっている姿が見られたが、その文章の効果という面では教師側の説明が多くなり、学習意欲が低下していくのがわかった。どう子どもたちにそうした価値について気付かせるかという点で課題の残った授業であった。



【図9 第5時の板書】

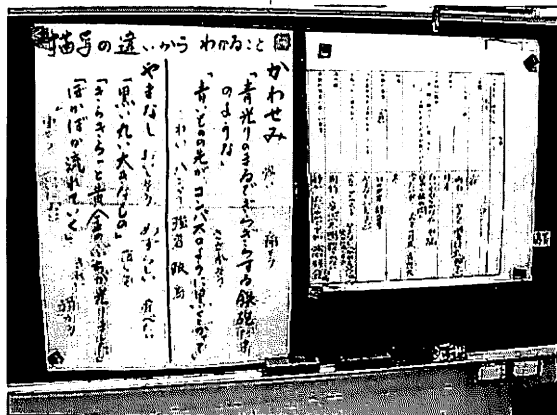
<p>【第6時】 五月の世界を読み取る①</p>	<p>*朝の連絡や、表彰状などで15分ほど遅れる。「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です」という前書きから、二という数字に着目し、「男女」「上下」「左右」などの対比構造を読み取った。さらに「五月とはどんな季節ですか」という問いに対し「たんぼぼ」「入学」「ぼかぼか」等の答えが出て、「生物が活動する動の季節」という風にまとめた。一方十二月は「冬眠」「雪」「動かない」などから、「生物の動かない静の季節」という風にまとめた。</p>	<p>叙述に即した想いや考えを引き出す</p>

【図⑩ 第6時の板書】

<p>【第7時】 五月の世界を読み取る②</p>	<p>クラムボンとは何かということについて考えた。クラムボンは「あわ」「光」「プランクトン」という説が出た。どちらも根拠があるが、「笑った」「殺された」等の表現から生き物であろうという段階でとどめることにした。クラムボンと魚とかわせみの関係を読み取り、五月の世界を展望した。その際「描写」についても語句として指導した。「鉄色に変に底光りして」という魚の描写から不気味さを読み取り、かわせみと魚の捕食関係から食物連鎖や弱肉強食の世界を捉えることができた。また、「あわ」が五月には七回出てくることを確認し、「シャボン玉のようなもの」「すぐに壊れるもの」という読みがなされた。しかし、それを作品解釈へと全体の意識を戻すことは不十分であった。どちらかといえば分析批評的な読みを試み、叙述から集団の読みを深めることができた。</p>	<p>叙述に即した想いや考えを引き出す</p>

【図⑪ 第7時の板書】

<p>【第8時】 十二月の世界を読み取る</p>	<p>谷川の描写から、十二月の場面設定を考えた。まず、季節が春から冬へ、時間が日光から月光へ、さらにかにの子どもの成長が変化している点であることを確認し、谷川の描写をひろった。「白いやわらかな丸石」「水晶の粒」「金雲母のかけら」「辺りはしんとして」などから、十二月はどんな世界か考えた。ただ、「どんな世界か？」という問いが具体性を欠き、さらにイメージを狭めたため、子どもたちの反応は良くなかった。それでも「静かな所」「平和な世界」「白の世界」等が出てきた。これを五月の「青く暗く鋼のよう」などの描写と比較して時間を終えた。子どもたちは全体的に学びが活性化しているとは言えず、細かい読みを終始した結果、イメージを楽しむという所までは至らなかったと思われる。</p>	<p>ことばに対する課題意識をもたせる 叙述に即してイメージを広げる</p>
<p>【第9時】 十二月を読み取り、五月と十二月の世界を対比してみる</p>	<p>ワークシートを用いて、五月と十二月の対比を行った。昼一夜 クラムボンーあわ 日光一月光 谷川の描写 春一冬 動の世界一静の世界 かわせみーやまなし 魚の死ーやまなしの死 恐怖ー安心 弱肉強食ー？という所を調べたが、教師側が考えているよりも、読み取りができていないことがわかった。</p>	<p>読みの過程を構造化していく 叙述に即した思いや考えを引き出す</p>
<p>【第10時】 題名「やまなし」の意味を考える</p>	<p>五月と十二月をワークシートを通して対比していった。特に五月は弱肉強食の世界であり、十二月はどういう世界かという問いが、子どもたちには難解であったようである。ということは十二月の読み取りがまだ浅いことを示している。そこで、十二月のイメージについて出し合った所、「白の世界」「静かな世界」「おだやかで平和な世界」などの発言が出て、五月とは対照的であることがわかった。</p> <p>さらにかわせみが出たため、やまなしの描写についても話し合い、そこから「やまなし」は「落ち着く」「重い」「きれい」などが出た。</p> <p>また、やまなしは死んだのかという問いに対しては「枯れた」あるいは「熟した」と考え「殺されているのではなく寿命で死んだ」と確認した。一方まだ死んでいないと考える児童もおり、子孫を残すために落ちてきたという説を打ち立てた。ただ川の中ではなくさってしまう、と反論にあい、他の人のために落ちてきたのだろうという所までは、全体で共有された。</p> <p>こうして対比という作業を通して、考えを出し合い、一つひとつのことばのイメージから作品や作者の意図を読みとっていった。やまなしやカワセミがシンボリックな存在として意味を発揮した場面であった。</p>	<p>読みの過程を構造化していく 叙述に即した思いや考えを引き出す</p>



【図12】 第10時の板書

<p>【第11時】 この作品で賢治の 伝えたかったこと について考える 〈本時〉</p>	<p>何故題名を「やまなし」としたのか ・五月と十二月という二つの場面を設定した意味 賢治が伝えたかったことは何か 青いほのおは何をあらわすのか</p>	
<p>【第12時】 やまなしを音読し、 感想を書く</p>	<p>前時の学習を元に、「やまなし」で賢治が訴えたかったことをまとめた。その後十分ほど時間を取り、感想を書いた。感想は下記に示してある。</p>	<p>様々なものの見方考え方に ふれる</p>

6 本時

(1) 目標

題名とこれまでの対比から、「やまなし」において作者が最も言いたかったことについて考える

(2) 創り出したい学び

「やまなし」という題名をつけた理由について、「ただやまなしが好きだから」「おいしいから」という考えから、仲間との学び合いを通して平和でおだやかな世界をめざしていた賢治の考え方、賢治が伝えたいことへと認識を変容していく。

(3) 展開

主な学習活動	予想される子どもの姿	個をつなぐ教師の働きかけ
<p>1. 五月と十二月の世界の 総括 をする。</p> <p>2. もし「五月の幻灯に題名をつけるとすると、どんな題名になるのか」。</p> <p>3. 題名について考える。</p>	<p>五月は弱肉強食の世界。 十二月はあたたかい世界。</p> <p>「弱肉強食」 「かわせみ」 「クラムボンとかに」 「かに物語」</p>	<p>板書によって児童の考えを構造的に示していく。</p>
<p>なぜ題名は「やまなし」なのか</p>		
<p>4. 五月の幻灯が入っていない理由は何か。</p> <p>5. 賢治は何を伝えたかったのか、賢治が題名に込めた想いや願いは何だったのか考える。</p>	<p>「やまなしがすきだから」 「やまなしがおいしいから」 「いいにおいがするから」</p> <p>「魚が怖い所に言ったから」 「五月は描写が違うよ」 「十二月の世界のことを訴えたかったのでは」</p> <p>・美しい十二月の世界が好き。 ・十二月の世界を強調したいから。 ・賢治は、やまなしのように犠牲になる生き方を求めているのではないか。 ・青いほのおは死んだやまなしが天国に行ったほのおでは？</p>	<p>「青いほのおをあげる」などの叙述に即し、やまなしの死と結びつけて賢治の世界観についてイメージを広げる。</p>

授業の逐語記録

- T：いよいよまとめの部分ですね。最初の文はどう書いていますか？
- C n：2枚の青い幻灯です。
- T：2枚言うとは何と何ですか？
- C n：5月と12月。
- T：時間、いつ頃ですか？
- C n：昼と夜、日光と月光、
- T：谷川の描写が違ってきますね。
- C：青く暗く鋼のよう。
- C：水晶の粒、
- T：季節も変わりましたね。
- C：春から秋、冬。
- T：天井から飛び込んでくるものも違いました。
- C：かわせみとやまなし。
- T：死んでしまったのは？
- C：魚とやまなし。
- T：やまなしは5月にでていないけど題名は「やまなし」ですね。5月はかわいそうですね。
- T：5月の幻灯に題名をつけるとしたら、みなさんだったらどんな題名をつけるかな？考えノートに書いてみてください。
- C：僕はクラムボンとします。クラムボンがいろいろかかっているからです。
- T：違う人いますか？
- C：恐怖のカワセミ。
- C：カワセミだけがいいと思う。
- C：クラムボンの生と死。
- C：かには見た、魚の生と死。
- C：谷川の春。
- C：かにおしゃべり。
- C：弱肉強食。
- T：なぜ弱肉強食なんですか？
- C：春には動物たちが動き出して、活発になる、肉食獣がカワセミと魚が食べているシーンあって、弱肉強食だった。
- C：クラムボンの笑顔
- T：ところが宮沢賢治は題名を「やまなし」にしています。なぜ「やまなし」にしたんでしょうね。
- T：題って何？
- C：タイトル。
- C：一番見せたいもの。
- C：作品の表題。
- C：内容を短く。
- T：題名には想いとか願いとかが詰まっているんだね。そこら辺考えてなぜやまなしとしたかな？1分くらい相談して考えましょうね。
- C：（児童が席を離れて考えを述べあう）
- T：意見お願いします。
- C：賢治さんはやまなしが好きだから。
- C n：同じです。
- C：つけ足し、実が好きだと想います。
- C：質問。やまなしって何ですか？
- C：やまなしとはバラ科の植物で、山林に生えている。
- T：写真を出す。
- C：賢治さんがやまなしが好きかもしれないけど、弱肉強食でもやまなしのように一生懸命生きているやまなしのすばらしさがあるから。
- T：やまなしの生き方がすばらしいと言うことだな。ただ好きではないんだな。
- C：過去にやまなしの思い出があった。
- T：何でそう思ったの？
- C：教科書にはないけど。
- C：話変わるけど、アンパンマンは何でアンパンマンかという、昔作者がもらったから、同じ食べ物だから、思い出があったのかもしれない。
- T：ただ、アンパンマンの話はできないけど、Oさんがノートの書いていますが、
- C 4：やまなしに妹の思い出があるのかもしれない。
- T：推理しながらも教科書にはないので、それはおいておきます。どんな生き方をしているか、教科書を見てみましょう。カワセミの登場の仕方を教えてもらえますか？
- C：にわかに天井に白い泡が立って、鉄砲玉のようなものが飛び込んできました。
- T：そのあとどうしますか
- C：狩り、魚を食べる。
- T：やまなしの登場の仕方はどうですか？
- C：そのとき、トブン。天井から落ちてきまし

た。

T：カワセミは殺しましたが、やまなしは何をしましたか？

C：飛び込んで流れて、川はいいにおいになった。

T：魚とカワセミに共通するものは、

C：水の中で、死んでいる。

T：同じように飛び込んでいますが、何か違うみたい。何が違うのだろう。これがわかれば題名にやまなしになったのかわかるかもしれない。考えた人？

C：カワセミはやまなしと同じで落ちてきたけど、やまなしは魚やかにを殺さないで、つけない。

T：どんな風に生きているかという傷つけない生き方なんだね。

C：恐怖と喜び。

T：どれが恐怖なの？

C：カワセミは食べるためにやってきたけど、喜びはやまなしが・・・

T：やまなしは自然の恵みと言うことなんだね。

T：ほかにある？

C：やまなしは熟して自然と落ちてくるけど、カワセミは自分から飛び込んでくる。

T：やまなしは自然なんだね。自然と命がなくなっていくのは？

C：寿命。

T：まだいますか？だんだん賢治が「やまなし」とした理由がわかってきますか？自然と落ちてくるような生き方を賢治はやっていたんだね。

T：このあとみなさん死んだときは、葬式やるでしょう。5月の時は何が流れていた？

C：白いかばの花びら。

C：12月は青いほのおだ。

C：月光のじもだよ。

T：5月はお葬式の感じだけど、12月はどうなっている？

C：青白いほのおだから、葬式じゃない？

C：死後の世界かも

T：なんで青白いほのおがゆらゆらしているの？

C：なんか、月の光が、波っていうか、川の流

れでゆらゆら見えるんじゃない？

(ここで時間となる。)

逐語記録から見えるもの

まず、5月の題名に対する発問に対して「かにおしゃべり」や「クラムボンの生と死」が出ている。その一方で「かには見た、魚の生と死」「弱肉強食」という題名が提出されている。作品のテーマに近づいていると考えられるのは後者の方である。集団で読み深めるとき、徐々に作品の核に近づいていく場合と、突発的にいくつかの深い読みが出される場合がある。そこで、「弱肉強食」を教師は取り上げ、集団に問いを投げかけたのである。ところが、集団ではそこに食いつくことなく、「クラムボンの笑顔」と違った角度から考えた題名が提出される。そこで教師は「なぜ12月だけのやまなしを選んだのか、考えさせることによって読みを深めていこうとしているのである。いくつかのやりとりを経て「やまなしのように一生懸命生きているやまなしのすばらしさがあるから」という発言までたどりついた。実はこの児童はその直前の授業後の感想で、「宮沢賢治は、やまなしの生き方が好きだったのではないか」ということをノートに書いていた。普段は全く発言しない児童であるが、他の仲間たちのやりとりを聞いている過程で、どうしても自分の考えを表出したいようになったのであろう。

また宮沢賢治を作家論的に調べていた児童は、妹トシの思い出を作品に重ねている。この読みを取り上げてしまうと、授業が作品を離れ拡散してしまう危険性を感じたため、あまりふれずに進行した。そこで「登場の仕方」を持ち出し、5月と12月を対比させ、作者のやまなしに対する想いに迫ろうと考えたのである。そこで「やまなしは魚やかにを殺さないで傷つけない」という発言を引き出すことができた。この児童も普段めったに発言しないが、何かに突き動かされたように話し始めた。この考えはずっとあたため続けていたのだろう。授業前半でつぶやく声を耳にしていたのである。その意見に

触発された形で「やまなしは熟して自然と落ちてくるけど、カワセミは自分から飛び込んでくる」と言う発言が出てきた。自然に寿命を迎え、自然体で生きる生き方をしつつ、利他的、布施的な生き方を賢治は志向していた。それを良く捉えた発言だと思う。後に見せる授業後の感想からも、こうした読みの深まりが見える。

このように、一つひとつの発言をつなぐことによって集団として作品に新しい意味を付与しているのである。その際事前にノートをチェックしておくことにより、児童それぞれの考えを把握しておく。そうすることによって、児童の学びに寄り添いつつ、授業の方向をコントロールすることができるのである。意見を集約し、集団の読みを深めていくことに有効であると思われる。

【授業後の児童の感想】

- 私がやまなしで思ったことは、石の名前がいろいろ使われていたりしていいなと思いました。あと、きれいなことばが使われていて、川のイメージがうかんでくるようでした。宮沢賢治さんは平和を訴えたかったのかなと思いました。クラムボンというのはいまだに不思議です。
- 賢治さんはやまなしのように、年を取っても人を傷つけない人になりたいと思ってこの作品をつくったと思う。
- 宮沢賢治は、やまなしの中で自分の理想「人を傷つけない生き方」を、合理的なことが良いと思われる世の中で進めようとしたのだと思う。
- 僕はやまなしを読んで思ったことは、賢治はやっぱやまなしみたいな生き方をしたかったのかな。賢治はそういう生き方ができなかったの、かわいそう。
- 僕はやまなしは、宮沢賢治の理想とする生き方が書いてあると思った。かわせみは自分の意志で水の中に飛び込んだけど、やまなしは熟して落ちてきたので、人を傷つけず、まわりの人を幸せにする生き方を賢治はしたかったのだと思う。
- やまなしの勉強は色々な考え方があって、奥深い話だなあと思った。今までのお話で一番楽しかった。
- 私はやまなしを読んで、クラムボンなど意味がわからないことばがたくさんあったなと思います。
- 宮沢賢治は、いろいろな表現（ラムネのびんの月光、青白いほのお、金剛石など）をして谷川の底を表していて、さらにその表現で、死んだ魚ややまなしを火葬や花を添えたりしてすばらしいです。
- やまなしの勉強は題名のことなどいろいろなことがあって、奥深い話だなあと思いました。
- やまなしは宮沢賢治の性格を表していたと思う。パソコンで調べたり、イーハートープの夢を見たりしたときに、とても思った。優しい人だと思った。
- 五月は魚がかわせみに殺された時に白いカバの花びらが天井をたくさんと滑っていきました。ってところがいいなあと思っています。十二月は安全でうれしい所がある。
- 私は最初何を伝えてたかったのかわからなかったけど、授業をして、やまなしはどんな生き方をしていたのかと考えながら読みました。
- 宮沢賢治はすごい作品を作ったなあと思いました。やまなしを食べてみたいと思いました。
- 五月は何かと考えたとき、最初は弱肉強食と思ったけど、よく考えてみると食物連鎖だと思います。なぜなら弱肉強食を調べてみたら、人間界の話でした。多分誰かが弱肉強食を、肉とか、食べるとかに注目して動物の由来からきているだろうと勘違いしてこうなったので、僕は後で気付いて良かったと思います。それで五月は食物連鎖が合うと思います。
- やまなしは正体不明のものがたくさんあります。でも私も死んだときは火葬は絶対やると思います。
- やまなしを読んで感じたことは、五月で谷川の上流の世界（恐怖）、十二月で谷川の下流の世界（喜び・安心）はまるで我々の人生のようでした。つまり、苦しみや恐怖が有れば、その分喜びもあると人生の楽しさを教えてく

れました。

- やまなしは2枚の幻灯で表されていて、五月には季節は春で、クラムボンの話をしている、十二月には、季節は冬で、かのにの親子の話をしている楽しかった。かのにの親子の話を中心に書いていた。
- 私は五月は疑問や悲しそうと思い、十二月はとても楽しそうな雰囲気かなと思いました。
- やまなしをよんで、かのにの親子たちはいろいろな気持ちになり、かわせみとやまなしが来ることで、怖いと思う所から楽しいと思えるんだと思いました。
十二月で、やまなしが落ちてきたとき、かのにの子どもは、「かわせみだ」と言ったので、五月での恐怖があったからだと思います。
五月での表現の仕方は、怖い感じを出している、十二月では、やさしく美しい感じを出していた。
- やまなしを読んで、五月は魚が何かを取って、その魚を「かわせみ」が捕るというちょっとかわいそうなお話で、十二月はやまなしの生き方が他の人を幸せにする生き方なので、二つを比べると全然違うなあと思いました。私もやまなしの生き方がすごいと思います。
- 私は、五月は恐ろしい世界で十二月はとても平和で、自然の恵みがある世界。
- 最初読んだときは、すごい世界と思いました。ですが、だんだん今だと、命、家族などの大切さを教えてくれます。また、「白い腹がぎらっと光って」という表現も宮沢賢治らしいことばですよ。おもしろいです。
- 宮沢賢治のやまなしを読んで、最初は想像豊かだなあと思っていましたが、どんどん読んでいうちに、なぜ魚は天敵がいるののにのんきにしている、かには天敵がいらないのかと思いました。また、イサドという町は魚だけの町なのか。
- 私は宮沢賢治は、この物語に出てくるかにかにたちがけんかしていたとき、やまなしが落ちてかにかに達が幸せになるという、やまなしが幸せにするからすばらしいということ^をを伝えたかったと思う。一つの植物が幸せを作ったという

すばらしさを訴えたい

- 私はやまなしは神のようだと、かになりにきって見ていました。やまなしがかにのところに落ちてくる所が感動しました。そしてお父さんのかにもラブです。
- 大まかな戦いと平和。そしてこまかな戦いと平和があると思いました。理由は大まかな戦いは鳥と魚。こまかな戦いは兄弟同士のあわのはき合い。ちょっとした兄弟げんか。こまかな平和は兄弟が夜遊べていること。大まかな平和はやまなしが落ちてきたこと。もし、ご飯を食べていなかったら、幸運で、ご飯を食べていても、幸運だから。賢治は自分を犠牲にしてでも人に幸せ(平和)を提供しろつと訴えているように感じました。
- やまなしは平和、祝福などの意味を表すと思う。青白いほのおは、波が月光に反射して光ながら揺れていると思う。金剛石の粒は、波が水面に打たればねた、水の粒だと思う。
- やまなしはクラムボンとか青白いほのおの意味がよくわからない。だから宮沢賢治は読者に考えてもらって、話の世界を楽しんでもらいたかったと思う。要するに一人一人違うやまなしを楽しんでもらいたかったのではないかとおもう。
- 宮沢賢治のは、いろいろな表現でことばを表して、イサドやクラムボンは宮沢賢治の作ったことばでおもしろかった。最初はやまなしは無いと思っていたけど、本当にあってびっくりした。
- クラムボンという話で、宮沢賢治が伝えたかったことは、自分のこの話は宮沢賢治が夢見た世界だったのかなと思います。

【考察】

授業後の感想から、読みの深まりがみえる。それは他者の幸福を願う賢治の生き方に迫った感想が見られるからである。この単元で仲間と学び合うことにより、難解であった「やまなし」を読み解いていったことがわかる。集団の学び合いを通して「いみわからん」と感想を書いた児童が、作品の奥深さを感じ、

「平和や命の大切さ」を読みとっていた。これは普通の授業の中で地道にノート指導を行い、児童の学びに即した働きかけをおこなった結果導き出された感想だと思われる。授業の中で個の読みを集団の読みとりに位置づけ、互いの読みとりに触発されつつ、全体の読みを高めていく。そうすることによって、集団の読みが深まることがわかった。

参考文献

- 『やまなし 全発問・全記録』雁坂明 2004年 株式会社ルック
『文芸教材編「やまなし」の授業』山中吾郎 2003年 明治図書